

シェイクスピアにおけるキリスト受難者としてのリチャード2世

柏 原 陽 子

Richard II in Shakespeare

Yoko KASHIHARA

はじめに

シェイクスピアは、『リチャード2世』(The Tragedy of King Richard II) (1595年)の制作にあたって、多くの原典を参考に行っている。しかし、最も重要な原典はあくまでも彼自身の想像力であると言われている。そして、それに加えて、シェイクスピアが当時の愛国主義的な風潮によって書いたことは事実であろうと思われる。さらに、シェイクスピアが追求した「人間」探究の中で、彼はリチャード2世の歴史観と人間観、原典と独創の調和を求めたのである¹⁾。

『リチャード2世』のリチャード2世は、気の弱いセンチメンタルな必ずしも善良というわけではないが、在世中は国民に好かれた、本質的には弱い善良な人間として描かれている。そこに、我々観客は共感を覚えるのである。この論文では、人間味溢れるシェイクスピアのリチャード2世が、キリスト受難者として苦悩した姿を、歴史とキリスト教を踏まえながら検証したい。

I, キリスト受難について

キリスト教での受難は、イエス・キリストが宣教の旅の最後にエルサレムに至った時、そこで逮捕され裁かれ、虐待を受けた後十字架上で刑死したとされている。(マタイの福音書21～27章)(マルコの福音書11～15章)(ルカの福音書19～23章)(ヨハネの福音書12～19章)キリスト教ではこの間にイエスが受けた苦難を受難と呼び、これによって人間の原罪

平成16年2月26日 原稿受理

大阪産業大学 教養部 非常勤講師

1) 大山俊一 『シェイクスピアⅢ』(筑摩書房、1984年)、418頁。

をイエスが贖ったと考えられている。受難の元来の意味はキリストの受難から由来する²⁾。受難という言葉は、一般的に生活の中でも使われることもある。人が苦しみや禍を受けるときである。天変地異の地震や風水害、これらは人の力ではなく、自然の力によるもので、人々は、ただ自然の大きなエネルギーに恐れ耐え忍ぶしかない。他に、国と国との戦争、民族紛争、差別、それに伴う飢餓や大量殺人、憎しみなど、人間が生を受け生きていくには、数多くの受難がつきまとう。本人自身にはなんら責任がなくても、戦争やその国のイデオロギーによる粛正、または冤罪で命を落とすこともある。

そのような受難で命を落としたものは、有史以来数限りない。これら受難者の中でより純粋に、キリスト教を宣教しようとしたキリスト教の教えを守ろうとした人たちの生き方が、いかに苦難に満ちたものであったか、イエス・キリストを代表として、本人には何ら罪はないが、周囲の者たちの妬みや嫉妬や恐れによって命を落とす、または耐え難い苦しみを受けた者の人生をキリスト受難としたい。

キリスト教の受難は、ローマでの皇帝ネロによる迫害が特に有名である。キリスト教徒はその信仰のため、逮捕され牢獄に入れられ、獣のかぶりものをして、または人間の姿のままに猛獣の餌食となった。地中海世界の全域を征服したローマの人々は、常に隣国との戦闘にあけくれ、残酷な公開処刑や、流血のショーを好む傾向にあった³⁾。ローマのコロセウムで、その様なショーが行なわれたことは人々によく知られている。キリスト教徒たちは、自分の信仰のゆえ、あらゆる苦難に耐え命を落としたのであった⁴⁾。「大迫害」(The Great Persecution) (紀元3世紀)が行なわれても、人々はあきらめず、キリスト教ローマ帝国を勝ち取ったのである⁵⁾。彼らの一生は、世の流れに逆らうものであった。ローマ時代のローマは、国内は平和で、人々は栄華に奢り、すばらしい食材、美味しいものは地中海を経て、アフリカ大陸から送られた。ローマ市民は世界の覇者として、神聖ローマ帝国を支配するものとして、栄耀栄華を極めた⁶⁾。それらの栄華に奢れる生活を世の流れとするならば、キリスト教徒の生き方は世の流れに真向から対立するものであった。当然その間には、対立や矛盾が生じてくる。

「あなたは、若かったときには自分で帯を締めて、自分の歩きたいところを歩きました。しかし年を取ると、あなたは自分の手を伸ばし、他の人があなたに帯をさせて、あなたの行

2) 『世界大百科事典 第13巻』(平凡社, 1988年), 242頁。

3) K. Hopkins 高木正朗訳 『古代ローマ人と死』(晃洋書房, 1996年), 11頁。

4) 松浦純 『十字架と薔薇』(岩波書店, 1994年), 90頁。

5) 豊田浩志 『キリスト教の興隆とローマ帝国』(南窓社, 1994年), 245頁。

6) 弓削達 『ローマ帝国とキリスト教』(河出文庫, 1994年), 337頁。

きたくないところに連れて行きます。」(ヨハネの福音書21:18)とイエス・キリストが予言をしたパウロの一生はその宣教のため苦悩と受難に満ちたものであった。彼は、神の「召令」によって苦難の伝道に出かけたのである⁷⁾。彼自身「事実、私は、今、この時の苦難は、私たちに啓示されているはずの来たるべき栄光に匹敵するものではないと考えている。」(ローマ人への手紙8:18)と、常に栄光を望みあらゆる苦難に耐えている。ユダヤで捕えられ、ローマへ送られ投獄され、その獄中から多くの手紙を書き送っている。その中に、キリスト教徒の奉仕者エパフロデトスの受難(フィリピ人への手紙2:25~26)なども示している。皆キリスト教徒は、信仰ゆえ、裏切り、そしりを受けているのである。時には、鞭打たれ、十字架に付けられることもあった。けれども、皆その受難に対して相手を許しているのである⁸⁾。イエス・キリストの十字架上での「父よ。彼らをお許し下さい。彼らは、何をしているの分からないのです。」(ルカの福音書23:34)は有名である。また、パウロは、3回に渡る伝道旅行の末、ローマ後で最後に晩年の心境を綴る。それはうらやましいほど透明な語調である。(第Ⅱテモテ人への手紙4:6~8)しかし、リチャード2世は殺される時、殺害者エクストンを呪って死んだ。そこは、パウロやイエス・キリストなどとは大きく違うが、一般の人間ならば、誰もが自分の苦難を恨むのが普通である。そこに人間性が示されているのではないのだろうか。イエス・キリストやパウロのような神または神に近い人たちは別として、普通の人間で、キリスト教徒として受難を受けた者として検証したい。

Ⅱ、1300年代のイギリスの社会状況

シェイクスピアが、ホリンシェットの歴史書からその時代の事実を知り、歴史劇を書いたように歴史劇では、その時代の道徳や政治、法律や事件を無視することが出来ない⁹⁾。よって、リチャード2世が苦難に満ちた人生を送ったことは、1300年代のイギリスの社会状況と大いに関係すると思われる。

エドワード3世は、わずか15歳で即位し、その治世の途中の1337年から1453年までイングランド人が国民的と称することのできる最初のヨーロッパ戦争、すなわち百年戦争が行われた。フランスを荒廃させ略奪するために、イングランド軍は小規模ながらその効率の良さは国民的結合と国民精神の成果であった。イングランドは島国で遠くに離れた位置にあったことと、強力な王をいただいていたことのおかげでノルマン征服以来ある程度国内の平和を

7) 田中勇二 『原始キリスト教史』(日本基督教団出版, 1985年), 182頁。

8) 八木誠一 『パウロ』(清水書院, 1985年), 73頁。

9) E.M.Waithed ed. SHAKESPEARE THE HISTORIES (Prentice-Hall, Englewood Cliffs, N. J.1965), p. 30.

達成した点では、他のヨーロッパよりも一歩先んじていた。そして、封建制から国民(国家)へと移りつつあった。だが、この戦争は、一進一退で、なかなか結果は得られず、長年の戦争は封建制の崩壊を招き、封建末期の様相が朝野をおおった¹⁰⁾。しかし、これにも国民の間に意気阻喪するにやまれぬ事情があった。未知に東方世界からヨーロッパにはじめて襲来してきた黒死病の流行である。1348年1月南フランスに上陸後、西ヨーロッパに蔓延し、イギリスに伝播した。人口の約三分の一あるいは半分近くの間人を死に追いやった。全住民が死に絶えたために地上から消えてしまったいくつかの村落や小村さえあったのである。ロンドンでも1350年には、戦争を中断させるほどの犠牲者を出した¹¹⁾。

エドワード3世時代にイングランドの人口が16カ月の間におよそ400万から250万ぐらいに減少したことは階級闘争を促進し、農奴解放の動きをいっそう激しくした。すでに解放されて自由になっている労働者は、更に高い賃金を要求してストライキを行ない、一方、自己の労働に自由をもたない農奴は、今や領主と農民の両方の側にとってともに貴重さを加えてきている慣習的諸奉仕についての荘司の法的要求に反対して闘争する。領主と荘司とは恐るべきジレンマに陥っていた。領主直営地の半ばや地代支払いのうちの半ばは、耕されないまま放置されて地上は生い茂る芝草やつたに覆われ、耕作人は死に、住み手のなくなった小屋の屋根わらは崩れ落ちていた。生き残った者は、法や慣習に反対して公然と暴動を起こした。世の終わりがやってきたようにさえ思えたが、しかし支配階級はいまだ利益と略奪品を得る源泉と考えていた対フランス戦争を決してやめようとはしなかった¹²⁾。

苦境に置かれた領主層が取り上げたもう一つの処置は、自由身分の労働者が高賃金を求めて移動することを制限し、これ以上農奴解放が進むことを防ぐために、法律によって賃金と価格を下げようとする努力をしたことである。そして、農奴が無視するようになってきたマナー裁判から離れて議会の議場で法律が論議されるようになったが、不幸にも議会は、余りにも排他的に在地ジェントリー層と都市の経営者層の利害を代表していた。1351年には、労働者規制法によって公平であるように、賃金だけでなく食料品の価格をも旧来の標準に釘づけしようとした。しかし、どのような法令も一山しかないパンを二山にすることはできないし、一人しかいない労働者を二人にすることはできない。どのような議会制定法も黒死病を押しとどめることはできなかったし、時代精神を打破することはできなかった。今や人々は社会の根底をゆるがすような質問「アダムが耕しイヴが紡いでいたときには、いったい誰がジェントルマンだったのか」を互いに問題としたのである¹³⁾。

10) 小嶋潤 『イギリス教会史』(刀水書房、1988年)、48頁。

11) 川北稔 『イギリス史』(山川出版、1998年)、104頁。

12) G.M.Trevelyan, HISTORIES OF ENGLAND (London, Longman, 1973), p. 283~287.

13) G.M.Trevelyan 大野真弓監訳 『イギリス史1』(みすず書房、1987年)、230頁。

そして、いまだ土地に縛られている農奴たちは、仕事を怠け、領主直営地における賦役を拒んだ。彼らのうち一部は、森の中へ逃げてロビン・フッド型の匪賊になったが、このことは、貧しい農民の味方で富める教会人の敵であるこの義賊の伝説を作り上げる一助となった¹⁴⁾。

このような混乱期にエドワード3世は老い、黒太子の健康は衰えていった。更に財政負担は簡単には解消できなかった。リチャード2世の未成年期の無能な統治は嫌われ、軽蔑された。人頭税の取り立てがうまく行かず、不評を買ったにもかかわらず、1377年と1379年の3倍もの比率にあたる、一人当たり1シリングの人頭税を対フランス戦争のために貧民に課せられると、反乱が一挙に広がった。イーストアングリカやロンドン周辺諸州の人々は武装蜂起してロンドンへ向かった。ワットタイラーの乱(1381年)は、農民としての不満と願望の表れであった。上流階級は一揆の勃発に驚駭し、しばらくは中央も地方もなすことを知らなかった。暴徒がロンドン市内に導き入れられ王(リチャード2世)はロンドン塔に逃れた。最悪の事態は回避されたが、リチャード2世は暴徒と会談するためマイル・エンドへ出かけ農民の隷農状態からの解放を約束した。これは形式的なものであったが、秩序崩壊という時代の流れには逆らえなかった。一揆の多くは幸福感にひたり帰って行ったが、他の一部はロンドン塔に乱入してカンタベリー大司教サドベリーをタワーヒルで処刑した。多くの人が集まりこの残虐な処刑を見て勝利の叫びを挙げた。彼が大司教であったからと言って、人々の目には神聖な人物とは映らなかった。教会と民衆の関係は、その根底に決定的な変化が生じてきていた。すなわち、教会への不信と秩序社会の崩壊であった。

イングランドのこの農民一揆は、秩序の崩壊を示しているが新しい自由の出現を促進しようとして行なわれたものであった。それは新しいイングランドが成長していくための苦しみの一つである。このようにして、農奴解放は主として14世紀に起こり15世紀のチューダー朝のもとで完成した。14世紀は、中世の世界教会が農奴解放によって起った新しい国民の真剣な要求に答えることができなくなった時代である。この時代は、絶対的な地位と権威を誇った聖職者や神の代理人としての王の地位が低下したと言うよりもむしろ俗人の地位が向上した時代であった¹⁵⁾。

Ⅲ、リチャード2世とキリスト受難がどのように関係があるのか

①リチャード2世が神の代理人である王の意義

イギリスの王国は、代々有力貴族が王を努め、その血の濃さで王位が決められた。そして長子相続であった。リチャード2世は、エドワード3世の長男、エドワード黒太子の息子で

14) J.C.Holt 城戸毅監訳 『中世イギリスの法と社会』(刀水書房、1993年)、166頁。

15) トレヴェリアン前掲書、234頁。

あり王位に着くことは当然であった。王位に着けば、14世紀の英国では神の代理人として王国を納めるのが習いであった。王の立場がどういうものであるかは追放されていたヘンリー・ボリンブルックが帰国し、王の専横を憎んでいた貴族や民衆を味方に付けて王を裁判にかけて、王位を奪おうとする場面のカーライル司教の台詞に示されている。

And shall the figure of God's majesty,
His captain, steward, deputy elect,
Anointed, crowned, planted many years,
Be judg'd by subject and inferior breath,
And he himself not present?

(IV—1, 125~129)¹⁶⁾

I speak to subjects, and a subject speaks
Stirr'd up by God thus boldly for his king.
My Lord of Herford here, whom you call king,
Is a foul traitor to proud Herford's king,

(IV—1, 132~135)

リチャード2世の寵臣政治への不満で、貴族や民衆は皆、帰国したボリンブルックを歓迎し、リチャード2世からボリンブルックに王位は裁判によって速やかに譲られると思っていた。だが、カーライル司教は、中世キリスト教会の聖職者として社会秩序の崩壊に異議を唱えるのである。彼は司教として、神に励まされ、神が定めた王のためにと神格化された王を弁護するのである¹⁷⁾。これは、デリヤードも述べているようにシェイクスピアの芝居が、中世のキリスト教の考えに影響を受けた世界観で演出されているためである。彼の行動は、この裁判がボリンブルック一色に染められた中で、非常に勇気のある発言であり自らの命をも顧みない。そして、何人にも裁けない王の神格化、王の絶対性を唱え、その秩序が崩壊することによってイギリスに血で血を洗う大きな禍が生じると予言し、その大演説を終えているのである。彼は劇世界のモラル・バックボーンをなす人物となってある¹⁸⁾。しかし、ボリン

16) Agnes Lathan ed. THE ARDEN SHAKESPEARE KING RICHARD II (London, Methuen, 1991)

17) G.Holderness ed. Shakespeare's History plays Richard II to Henry V (London, Macmillan, 1992), p. 2.

18) 齊藤衛 『シェイクスピア饗宴』(英宝社, 1996年), 23頁。

ブルックはただちに彼を大逆罪としてロンドン塔に送っている。

王を神格化された中で育ち、直系の王位継承者として育てられたリチャード2世にも、自分自身は神に選ばれたもので、それによって王位に就いたと考える。彼は、イギリスの全ての人間は全て自分の臣下で、どのような力であっても自分を退位させることはできない。また、そのようなことは神がお許しになるはずがないと考えている。

Not all the water in the rough rude sea
Can wash the balm off from an anointed king.
The breath of worldly men cannot depose
The deputy elected by the Lord.

(Ⅲ—2, 54~57)

リチャード2世は、ボリンブルックに王位を譲るまで自分が絶対的な者であると考えていた。よって、ソールズベリーの一万二千の兵士がすべてボリンブルックのもとへ走ったという報告にも次のように言う。

Revolt our subjects? That we cannot mend.
They break their faith to God as well as us.
Cry woe, destruction, ruin, and decay
The worst is death, and death will have his day.

(Ⅲ—2, 100~103)

リチャード2世は、頼みとしていた叔父ヨークにも裏切られ、フリント城の前で勝利者ボリンブルックと会う。リチャード2世は名目上は王であるが、すでに実質上は敗者である。だが彼は王には神の助けが必ずあるとボリンブルックの集めた兵士一人に対し、神は天使一人を送ってくれと神を信じているのである。

For well we know no hand of blood and bone
Can gripe the sacred handle of our sceptre,
Unless he do profane, steal, or usurp.

(Ⅲ—3, 79~81)

またリチャード2世の横暴（叔父グロスターの暗殺、叔父ゴーントの財産没収など）に耐え忍び、最終的にはボリンブルックの味方をした叔父ヨークも、リチャード2世が王であるという立場で、追放されたボリンブルックの帰国に対し次のように言う。

Com'st thou because the anointed king is hence?

Why, foolish boy, the king is left behind,

And in my loyal bosom lies his power.

(Ⅱ—3, 95~97)

『リチャード2世』は、シェイクスピアの他の初期の歴史劇と違って、中世のキリスト教社会を色濃く反映している¹⁹⁾。それを示すかのように14世紀のイギリスのキリスト教社会を表わす神の代理人としての王の神格化の言葉が多く見られる。リチャード2世は直系であり、生まれながらの王であった。現代人からは理解しにくい神の代理人＝王の支配の絶対性という倫理の社会の中で、リチャード2世は最後まで自分が正当な王であるという認識を忘れなかった。言い換えれば、自分は、神が選んだ者（王）であると言う思いに捕われ、一種マインドコントロールにかかったかのように死ぬまでその思いから逃れられなかったのである。

これも14世紀の中世社会、キリスト教の観念で世の中が回っていると言う思いに捕われていた時代の悲劇であったのだと思われる。リチャード2世は、その古い時代感覚とともに生き、新しい時代の波のおしよせる中で、自分を見失って行くのである。そして、次代の王には、実力主義、能力主義のボリンブルックが台頭する。時代の流れとして、キリスト教秩序主義の価値観を打破したボリンブルックであったが²⁰⁾、皮肉にも彼もキリスト教の考えに捕われ、リチャード2世の死に対して十字軍遠征を行ない、死ぬまで正当の王（神の代理人）を殺したという思いに捕われ、エルサレムの中で死ぬことになるのである。左様に、この時代の王の地位は人々にとっては絶対的なもので恐れの対象でもあった。

②リチャード2世の性格、人物像

「『リチャード2世』は王の言葉の有効性を扱う芝居である。」と『シェイクスピアの言葉遊び』を書いたマラマッドが述べたように、リチャード2世は言葉のみを信じるタイプである²¹⁾。対照的にボリンブルックは言葉には行動が伴わなければ無意味だと考えるタイプであ

19) Nicholas Brooke ed. Shakespeare Richard II (London, Macmillan, 1986), p. 138.

20) 入江和生 『シェイクスピア史劇』(研究社, 1984年), 169頁。

21) M.M.Mahood, Shakespeare's Word play (Methuen, 1957), p. 73.

る。リチャード2世は直系ゆえに王位に着いた王で、言わばたたき上げ、またはのし上った人物ではない。能力的には、王位にふさわしくない無能な男である。そのため、追従たちを侍らせておくことになり、政治が混乱し、貴族の支持を失い従兄弟のボリンブルックに反乱を企てられ退位し殺害された。そのような王としての能力の無さや決断力の無さは、最初のモーブレイとボリンブルックとの決闘の場面から示されている。リチャード2世は二人に決闘を許し、格式を重んじた「儀式」を行ないながら、いざ決闘と言う段になって、それを中止させた。理由は平和な国家にありながら決闘などによってお互いの血を流させようとした(1幕3場125~139)と言うがその真意はどうもはっきりしない²²⁾。彼は決闘の結果を恐れ、実際問題として、どちらかが生き残って、ウッドストック殺しに関与していたことが明らかにされたら困るからであるが、この場面で明らかのように、王としては決断力のない無能の王である。死の床にある叔父ゴントの言葉がリチャード2世の評価を示している。

Now He that made me knows I see thee ill,

Ill in myself to see, and in thee, seeing ill.

Thy death-bed is no lesser than thy land,

Wherein thou liest in reputation sick,

. . .

Landlord of England art thou now, not king,

Thy state of law is bondslave to the law,

(II—1, 93~96, 113~114)

またリチャードの政治についてはノーサンバランドが述べている。

The king is not himself, but basely led

By flatters; and what they will inform,

Merely in hate, 'gainst any of us all,

That will the king severely prosecute

'Gainst us, our lives, our children, and our heirs.

(II—1, 241~245)

このように、リチャード2世は、王としての能力もなく政治手腕もなく金銭感覚にも疎い。

22) 日本シェイクスピア協会 『シェイクスピアの歴史劇』(研究社, 1994年), 76頁。

アイルランドへの出兵で戦費が必要になると、叔父ゴントの財産を没収し、王領の土地を抵当にして金を借り入れたり、富裕なものから多額の金額を調達させようとするのである。(1幕4場45～51)そして、自分は絶対的、神の代理人の王であると信じて、そのためにリチャード2世はボリンブルックを謀反人呼ばわりし、自分を太陽にたとえているのである。

So when this thief, this traitor, Bolingbroke,
Who all this while hath revell'd in the night,
Whilst we were wand'ring with the Antipodes,
Shall see us rising in our throne the east,
His treasons will sit blushing in his face,
Not able to endure the sight of day,
But self-affrighted tremble at his sin.

(Ⅲ—2, 47～53)

一個人の人間がこれほどまで、自分を神格化することができるのであろうか。現代人から見れば、理解のできない価値観がその時代を覆っていたように思われる。そして、リチャード2世は王権神授説の思考に支配されて、自分は神の代理人であると確信していた。そこにリチャード2世の悲劇があったのである。

For every man that Bolingbroke hath press'd
To lift shrewd steel against our golden crown,
God for his Richard hath in heavenly pay
A glorious angel. Then, if angels fight,
Weak men must fall, for heaven still guards the right.

(Ⅲ—2, 58～62)

だが、形勢が不利になるとリチャード2世は、自分の自信を喪失する。

I live with bread like you, feel want,
Taste grief, need friends. Subjected thus,
How can you say to me, I am a king?

(Ⅲ—2, 175～177)

リチャード2世は、元来王には向かない意志薄弱な信念のない人間である。王の能力はな

いが、彼はロマンチストで自分の言葉に酔いしれている。ボリンブルックに王冠を渡す場面では、やたら台詞が長くなる。まるで一人芝居を演じているかのようである。自分の悲劇を表すためにボリンブルックと自分との対比を深い井戸から水を汲み上げる桶にたとえている。

That bucket down and full of tears am I,
Drinking my griefs, whilst you mount up on high.

(IV—1, 188~189)

王位を譲るときでも、決断力がなく、これが神の本意か、それともボリンブルックの反乱による自分の力の無さかとリチャード2世は迷う。そして、王であるがゆえに自分の存在に意味があると考えている。

Ay, no; no, ay; for I must nothing be.
Therefore no “no”, for I resign to thee.
How, mark me how I will undo myself.

(IV—1, 201~203)

リチャード2世は、なんとか神のご加護を願うが、それもむなしく、時代の流れには逆らえず、ロンドン塔に送られ、何万人もの家来を抱えていた立場から、一人の捕われの身となる。彼は、人間の栄枯盛衰を目の当りに見ることになる。しかし彼は、強い者になびいていた貴族達を呪ったり、恨んだりするのではなく、これを転機に自分の内面「人間とは何か」と考えるようになるのである。牢獄でのリチャード2世は王と言う重荷から解放され、自分自身と言うものをありのままに、一人の人間として見つめることが出来るようになる。彼は心の奥底では自分が神の代理人だと信じながらも、聖書では悪いものがはびこる牢獄とされたこの世で、人間として孤独に耐えているのである²³⁾。そして、この孤独の中で、彼は決して自分が神のように強いものではなく、一人の弱い人間にすぎないと思うようになる。

Thus play I in one person many people,
And none contented. Sometimes am I king,

23) 鹿嶋春平太 『聖書の論理が世界を動かす』(新潮社, 1997年), 69頁。

Then treasons make me wish myself a beggar,
And so I am. Then crushing penury
Persuades me I was better when a king;

(V—5, 31~35)

これは、リチャード2世が素直に、自分の置かれた状況を述べた言葉である。いったい、自分は何であったのか、王として生まれて神に次ぐものとされながら、実際の自分はいかに弱く、無能であったか。そのためにボリンブルックの反乱にあい王位を追われて今に至ったのだとリチャード2世は過去を回想し始める。

So is it in the music of men's lives.
And here have I the daintiness of ear
To check time broke in a disordered string;
But for the concord of my state and time,
Had not an ear to hear my true time broke:
I wasted time, and now doth time waste me;
For now hath time made me his numb'ring clock.

(V—5, 44~50)

リチャード2世の心の中では、王は神の代理人であるのかという考えと、いや王として生身の人間、人間はしょせん、土の器に過ぎないという思いとが交錯しつつある。王であったときのリチャード2世の態度とは大きく異なり、牢獄の中では自分を見つめ、ある種の悟りの境地に達した感じさえする。その心境はまさに晴明なものである²⁴⁾。パウロの晩年の心境と似たところがある。ひたむきに走り続け、闘い続けたパウロは最後に晩年の心境をうらやましいほど晴れやかな語調で述べている。つまりパウロはキリスト教伝道のため、戦いの日々を過ごし世を去るときには、神の義の栄冠が用意されていると述べる。(第Ⅱテモテ人への手紙4:6~8) リチャード2世は王としての自分の生活が戦いの日々であったがゆえに苦しんだと述べている。しかし、最後には、神の代理人であったため、神の義によって魂が救済されると考えているのである。彼は、かつての馬丁との会話で、自分の苦しみの人生を馬にたとえている。

24) 曾野綾子 『聖パウロの世界をゆく』(講談社, 1982年), 369頁。

I was not made a horse,
And yet I bear a burthen like an ass,
Spurr'd, gall'd, and tir'd by jauncing Bolingbroke.

(V—5, 92~94)

リチャード2世にとって王の地位が苦悩の源であった。自分は王として生まれて、王として君臨したが、結果は反乱の憂き目に会い惨めな境遇にあると自分を客観的に眺め、第三者的な言葉を述べている。自分には死を除いてもう何も失うものはないのである。そして、かつての王として、そもそも王位には向かない気の弱いロマンチストのリチャード2世であったが血統としては正当な王であったがために、最後はボリンブルックの意を酌んだエクストンに殺されるのである。

That hand shall burn in never-quenching fire
That staggers thus my person. Exton, thy fierce hand
Hath with the king's blood stain'd the king's own land.
Mount, mount, my soul! thy seat is up on high,
Whilst my gross flesh sinks downward, here to die.

(V—5, 108~112)

リチャード2世は、最後に神の代理人として、最後の審判を下している。果たして、彼がこのような審判を下せる神の代理人としての王であったのであろうか。恐らく、この台詞は殺害される直前のリチャード2世の虚言にしか映らないであろう。だが、歴史の流れに翻弄され苦しんできた彼は、生涯最後の時に、まさに真の王となるのである²⁵⁾。その代償として死があり、後にリチャード、プランタジネットのヨーク公爵が述べているようにリチャード2世の悲劇は王位継承者として生まれた者の悲劇となるのである。(『ヘンリー6世』第2部2幕2場27) そして、叔父ヨークの「死はいくら貧しくとも、この世の苦しみを絶ててくれよう。」と述べているように、彼にとっては死が唯一の休息であったのである。(2幕1場152) 彼の魂は天に昇ることによって休息を得て、死によってこの世の苦しみから解放されたのである。彼の人生は王という十字架を背負った人生であった。

25) Anne Righter, SHAKESPEARE AND THE IDEA OF THE PLAY (Middlesex, Penguin Books, 1967), p. 113.

③ボリンブルック登場

『リチャード2世』の中でリチャード2世に続く主役ともいえるのがボリンブルックである。リチャード2世とボリンブルックは従兄弟同士であるが、性格や気質は対照的である。まずボリンブルックの立場だが、彼はエドワード3世の孫で、父はジョン・オヴ・ゴントことランカスター公で、リチャード2世と同じ祖父を持つとはいえ王の家来であり、プランタジネット朝を支える要員の一人である。

劇の冒頭にボリンブルックは、モーブレイからの決闘の申し込みの場面で登場する。王への反逆の疑いがあるとのことでモーブレイに糾弾されるが、彼はそれを全面的に否定し、その挑戦を堂々と受け入れる。実際には彼自身にも疑わしいところが多々あると思われるのだが、王や他の貴族の前では自分の正義を主張し、モーブレイに名誉を汚されたと述べる。

Which (the Duke of Gloucester) blood, like sacrificing Abel's cries
Even from the tongueless caverns of the earth
To me for justice and rough chastisement;
And, by the glorious worn of my descent,
This arm shall do it, or this life be spent.

(I—1, 104~108)

この台詞では、皆の前で大芝居を打ったという感が否めないが、ボリンブルックは物事に白黒をつけようとする傾向がある。そして自分の家柄や名誉を誇りに思っている。やがて決闘は中止になり、王からの追放命令を受けるのだが彼は、父ゴントとの別れの場面で、「これから追放の身をどこにさまよわせようとも。絶対、おれが真のイギリス人であることの誇りだけは捨てまい。」(1幕3場308~309)と述べている。その誇りが、彼を父ゴントの死後、財産を没収され、家の無い浮浪人と宣告されたときに反乱へと導くのである。

ボリンブルックはとても戦略的な男である。イギリスの貴族では血の古さが血統の良さの保証になる。そして、長年に渡る貴族同士の権力闘争の中で、権力を手中に入れたものが王となってきた。そして一方では、常に不満があり反乱を起こしたいと思う貴族がいるのである。そういう事情を熟知したボリンブルックは反乱を起こすにあたって有力な貴族であるノーサンバランドと若いパーシーに好意を示すのである。

I thank thee, gentle Percy, and be sure
I count myself in nothing else so happy

As in a soul rememb'ring my good friends,
And as my fortune ripens with thy love,
It shall be still thy true love's recompense.
My heart this covenant makes, my hand thus seals it.

(Ⅱ—3, 45~50)

このパーシーへの友情の誓約は、マキャヴェリ的な計算された懐柔を示すすばらしい一例である²⁶⁾。彼はリチャード2世の居城を取り囲んで王に退位を迫る場面でも、本意を隠して、あくまでも王の臣下としてふるまおうとする。

Henry Bolingbroke
On both his knees doth kiss King Richard's hand,
And sends allegiance and true faith of heart
To his most royal persons; hither come
Even at his feet to lay my arms and power,

(Ⅲ—3, 35~39)

絶対的な兵力を誇るボリンブルックが、リチャード2世に負けるはずもなく、これは一つの演技である。これは貴族たちに、自分がいかに平和を愛し徳の高い人間であることを示すことになる。そして、ウエストミニスター大聖堂で、叔父ヨークのリチャード2世は王位をボリンブルックに譲り渡すとの報告を受けて、皆の前で「神の御名において、玉座につくとしよう。」(4幕1場113)と王位をいただく。それに反対したカーライル司教は、マキャヴェリ主義の考えにより、ロンドン塔へ送られることになる。

彼の即位戴冠は、当時のウエストミンスター宮殿で行なわれる。「父と聖霊の御名によって、朕ことランカスターのヘンリーはイングランドの統治と王冠を求めるものなり。」とヨーク大司教とカンタベリー大司教がリチャード2世の廃位によって空位となっていた玉座にヘンリーを導き、すぐに聖母マリアが流浪の身となっていた聖トマスに与えた油でヘンリーを聖別した²⁷⁾。貴族から推薦され、同意の下に王になったのである。謀反を企んでいたヨーク公のオーマールを殺さなかったことは、情け深い、慈悲深い王という人物像を演出するためのボリンブルックの演技ではなかったか。彼の言葉は、リチャード2世とは対照的に、常に明

26) Irving Ribner, *The historical and political Dynamics* (London, Methuen, 1960), p. 98.

27) Christopher Hibbert 小池滋監訳『図説 イギリス物語』(東洋書林, 1998年), 96頁。

確で必要であることのみを述べる簡潔なものである。1300年代の混乱期に、民衆や貴族たちは、このような実力のある王、いわば王らしい王を望んだのである。ボリンブルックは民衆に支持されるための努力も惜しまなかった。(5幕2場17~21)そして貴族にも支持され続けようと試みた。まさに、リチャード2世とは正反対に人生の勝利者であった。しかし正統の王を殺したという罪の呵責は消えることはなかった。玉座を脅かす恐れのあるリチャード2世は、都合よく家臣が始末してくれ、後顧の憂い無く安泰な玉座を享受できるはずであったが、彼の玉座には暗雲が垂れ込める²⁸⁾。彼がエクストンを糾弾した肉親殺し(リチャード2世の殺害)で、アベルとカインの物語が言及される。その男(エクストン)を追放に処して、彼自身図らずも関わってしまったことに、手を拭おうとするのだが、良心に対して罪を否定することは出来ず、罪の意識は彼の上に重くのしかかり続ける。マクベス夫人の一度血で染められた手は、洗っても消えないという言葉のように、王を殺した罪の意識にさいなまれて苦しむことになるのである。ボリンブルックの罪の意識は、まだ中世の世界教会の王の神格化の意識を人々がもっていたことを表している。しかし、時は確実に流れ、新しい時は新しい意識を生む。リチャード2世が正統の王で生まれながらの王とするならば、ボリンブルックは王位篡奪したとはいえ、混乱した時代に、望まれて実力で王になったのである。やはり時代の流れには逆らえない過度期の中世から近世への推移をボリンブルックに感じることができる。

おわりに・結論

リチャード2世がこのように苦しみ、受難を受けたことにはさまざまな要因が考えられる。ひとつは、まず、本人の資質の問題、王として生まれたが決断力があるわけではなく、リーダーシップをとることができない詩的なロマンチストといったタイプであったこと。次に、その時代のイギリスは、フランスとの百年戦争の最中であり、財政難が続き民衆や貴族はこの戦争と内乱に疲れ切っていたという事情。そして黒死病、この病魔の恐怖は人々に「この世の終わり」を連想させ、退廃的な社会秩序の崩壊をもたらした。そして最大なものは、従兄弟ボリンブルックの反乱。この原因は、リチャード2世の寵臣政治や強引な政策の遂行にもよるが、叔父ヨーク公や有力貴族の大半にも見捨てられたことも大きい。彼は、これほど苦しめられるような罪を犯したのであろうか。彼は、ただ王位継承者として生まれたのである。このことが彼を苦しめ、王位篡奪された後でも「神の代理人である王であった」という

28) 齊藤衛前掲書、27頁。

ことで警戒され、ボリンブルックの潜在的な脅威となり、そのために獄中で無惨な殺され方をした。野心の塊の「悪魔」のようなエクストンによって、神の代理人である王が殺されたのであった。だが、彼の受難の人生は、死によって休息することになる。神の代理人の王ではあるが、苦悩に満ちた人生を歩んだ、より人間らしいシェイクスピアのリチャード2世に、我々観客は限りない魅力を感じる。そして、本人の言葉通り、彼の魂が天へと上り神の国へと導かれたことは、我々に、慰めと安堵感をもたらすのである。